

## 会長この一年

東京大学大学院理学系研究科 太田俊明

第11期の会長として一年が経ちました。会長に選ばれたと聞いて最初に思ったことは、放射光施設の人間でなくてどれだけ学会の活動を支えていけるかという不安でした。そこで、できるだけ行動力のある組閣づくりをしたい旨、西野さんに相談し、その結果、史上最強の幹事のメンバーが決まりました。(西野さんは本当に良く会員の状況を掌握しておられます。)雨宮さんは突然の入院で編集幹事を途中で曾田さんに交代されましたが、この1年間、庶務幹事の木下さんを初め、幹事のみなさんと西野さん、須藤さんのご尽力でなんとが一年やってこられたと感謝しています。

幹事会でまず議論したことが、評議員の任期が2年、その後の2年評議員になれないというシステムの問題です。これは過去、菊田会長時代に大隅委員会でも問題提起されていますが、やはり、放射光科学の指導的立場にある人が不連続にしか学会の活動や施策に意見が言えないというのは問題であろうと思われます。特に今回は、放射光の将来計画に対して、学会としてどのように対処するかという問題があり、そのことを痛感しました。そこで、一つの打開策として徹底的に電子メールを利用することにしました。現評議員に前評議員を加えた総勢60名を「拡大評議員」として、電子メールでいろいろな意見を聞き、特別委員会委員選出には投票権を持ってもらうようにしました。制度をいじるよりも幹事会の努力でこの問題はある程度解消されたと思います。

もう一つ頭を痛めた問題は、これまで放射光で業績を挙げられた有力会員が定年とともに脱会される件が顕著になったことです。脱会すると名簿からも消えてしまう訳で、寂しいことです。日本結晶学会では永久会員なる制度があるとのことで、なんとか、類似の制度を作って、功績のあった方々の名前だけでも残せないかと知恵を絞りました。しかし、永久会員認定のルールづくりが難しい、脱会届を

出されてから審議するというのはちょっとおかしいのでは、ということで見送りになっています。このことに関してご意見がありましたらご連絡下さい。

学会活動で最も重要なことは編集委員会による学会誌の発行です。今回、懸案であった年6回の発行にこぎ着けることができました。これには、広告収入を現状維持し、ページ数を減らすなど、企業努力が必要とされますが、さらに、郵送も多数会員のいる施設はまとめて宅急便にするなど、節約を図りたいと考えています。また、編集委員長はこれまで前回の会長が任命し、その継続でしたが、幹事会と学会の顔とも言うべき学会誌を担当する編集委員会が乖離しているのはおかしいのではと考え、今回、編集委員長の曾田さんには私の任期いっぱい務めて頂き、次期編集委員長は次期会長が任命するように変えました。

これまで、放射光学会若手奨励賞という名前でしたが、せめて名前だけでももう少し権威のあるものに変えたいという気持ちもあり、若手をとって、「放射光学会奨励賞」に名前を変えました。今回、4名の応募があり、厳正な審査の結果、蛍光X線ホログラフィーと共鳴X線散乱で顕著な業績のあった2名の方を選びました。

現在、学会費は年6千円であり、これはほとんど1年間の学会誌の印刷代、郵送費で消えてしまいます。そして、学会のその他の活動費用を年会での企業展示の収入に依存しています。このような変則的な実態は少々問題ではないでしょうか。いつかの時点で会費値上げやむなしとなると思われますが、それを理解して頂くためにも、まず、学会が価値のある学会誌を定期的に出し、ちゃんと活動していることを認識していただくことが必要ではないかと考えています。

以上がこれまで一年間の経過報告ですが、残りの任期一年間、幹事共々、がんばりますので、よろしくご協力お願いいたします。